
東方学園録 ～ここが幻想のフロンティア～

幻想郷の住人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方学園録 ～ここが幻想のフロンティア～

【Nコード】

N6698Z

【作者名】

幻想郷の住人

【あらすじ】

高校受験に失敗した”天崎 流音”と”高宮 柩”が入った学校。

それは私立幻想学園。

この学園で高校生活をする事になった！！

様々な種族が通うこの学校に二人はついて行けるのか！？

学園生活の始まり（前書き）

どうも、幻想郷の住人です。

今回は『学園生活』を題材にしてみました。

設定を考えるだけで3日掛かった……………。

そんな事は置いといて、この作品をお楽しみ下さい。

第1話、行ってみよう！！

学園生活の始まり

人々が巨大な板の前で騒いで集まっている。

今日は有名高校の合格者発表の日だ。

ある人は笑っていて、ある人は泣いている。

その人の表情が、その人の受験の結果だと思う……………多分。

「あちゃー……………落ちちゃったか」

だが私の場合は落ちても笑っていた。

私の名前は”天崎あまさき 流音りゅうね”。

中学は卒業出来たけど、高校受験に失敗した一人暮らしのかわいそうな美少女。

まあ美少女って言うてもオタクだから多分プライ0だね。

さて私は受験に失敗した訳なんだが別に気にしてはいない。

まあ有名なところって色々面倒だからね。

「やっぱり落ちたみたいだな……………まあいいや」

隣にいるのは私の幼なじみである”高宮たかみや 柁まさき”。

受験に失敗した一人暮らしの男。

彼も受験に失敗した事を特に気にしてないようだ。

「枉。一緒に帰ろ」

「ああ、いいよ」

（よし、枉捕獲！！）

私は心の中でガッツポーズしてから学校の門を出た。

私達は家へと歩いていく。

「ねえ。 裏道通らない？」

「裏道？」

「そ。 少し探検したいから良いよね？」

「わかった」

「あ、ここを曲がってつと……」

私は道を曲がって、柵を裏道へ連れていく。

しかし

ドンッ！！

「あたっ」

「きゃっ」

そこで誰かとぶつかった。

私はぶつかった人を見て、誤ろうとしたが声が出なかった。

目の前に居たのはとても美しい美女だったからだ。

「ん？ どうかした？」

「あ、……………怪我はありませんか？」

「私は大丈夫。貴方は？」

「大丈夫です」

「そう。なら良かったわ……………貴方は天崎流音さん。そして後ろに居るのは高宮柁君……………で合ってるかしら？」

「「！？」」

私と柁は名前を言い当てられてびっくりしてしまった。

見知らぬ人に名前を言われたらそりゃ驚くだろう。

「何故、俺達の名前を？」

「まあ企業機密ね。それより貴方達に渡したい物があるの」

「……………学園への招待状？」

「ええ。貴方達二人を私の学園に招待したいの。私は八雲 紫。よろしくね」

「でもなんで私たちなんですか？ 他に優秀な人がいるのに……………」

「二人には凄い才能があると思ったからよ。勉強とかは関係無くてね」

紫さんはそう言った。

私は胡散臭いと思って断ろうとして柗の方を見た。

そして柗は信じられない事を言った。

「……………わかりました。行きましょう」

「柗！？ いいの！？ あっさり承諾しちゃって!？」

「とりあえず学校に行けるんだ。俺は行きたいと思う」

「……………」

「流音さんはどうする？」

「……………柗が心配だから行くわ」

「そう。ありがとうね。学園へのと学園内の地図を渡しておくわ」

紫さんは私達に地図を渡してくれた。

「ありがとうございます」

「それじゃあ4月に会いましょう」

「はい」

「言い忘れてたけど私の学園は去年まで女子校で、今年から共学になったから男子はかなり少ないからね」

「「…………え？」」

「じゃあね」

紫さんはそう言って、歩いていった。

「……………」

「…………不思議な人ね」

「…………急いで帰ろう」

「うん」

私と柁は家へと走った。

紫さんと会ってから二ヶ月経った。

私と柁は渡された地図を頼りに学園を目指している。

完全寮生活らしいから、荷物を山ほど持って学園へむかうから辛い。

しかも歩いている道は山道のような道でさらに辛さが増す。

「はあ……はあ……もうすぐだね」

「ああ、もうすぐ見えてくるはずだ」

「……もしかしてあれ？」

「……そうじゃないか？」

目の前にあるのは中々綺麗な校舎。

その学校の名前は『私立幻想学園』。

何が幻想なんだろうか……。

そんなことを考えてる内に紫さんが出迎えてくれた。

「ようこそ、流音さん。柁さん。私立幻想学園へ」

「……疲れましたよ」

「とりあえず荷物を寮に運びたいんですが……」

「わかったわ。藍、二人を案内してあげなさい」

「わかりました」

そこに現れたのはこれまた綺麗な人だった。

綺麗なのは良いんだけど……狐っぽい尻尾が生えてる。

しかも9本。

狐っぽい尻尾が9本って事はもしかして……

「九尾？」

「当たり前だな。私は九尾の妖怪で紫様の世話役兼数学教師をしている八雲藍だ。よろしく」

「よろしくお願いします……って妖怪!？」

「ん？ 妖怪を見るのは初めてか？」

「はい。でも俺達、妖怪について調べたりしてたので名前ぐらいならわかります」

「んー!! 九尾に会えたから私はもう死んでも良いや!!」

私はテンションが上がっていた。

某忍者漫画に出てきた妖怪でもある九尾に会えたから当然だろう。

「おいおい。大袈裟すぎないか？」

「いやいや!! これぐらいの反応はしますって」

「あんまりはしゃぐなよ。流音」

「はゝい!!」

「さてと寮に案内しようか」

「またね」

紫が見送る中、私と柊は藍さんについていった。

私達は今、呆然している。

「ここが……寮？」

「ああ、そうだが？」

「デカすぎでしょう？ この寮は」

目の前に建っている寮を例えるなら渋谷一等地に建っている高級マンションだ。

まあ一等地の値段は知らないけど。

「流音の部屋は5階の508室。柁は5階の509室。これはその部屋の鍵だ」

「ありがとうございます」

「なんか高級ホテルっぽいなあ……」

「上がる時は階段か、そこの昇降機を使ってくれ」

「わかりました」

「始業式は明日だ。それまでゆっくりしているといい」

「はい」

「それでは私はこれで」

藍さんは校舎の方へ歩いていった。

「さてと部屋に行きますか」

「そうだな」

「とりあえず早く部屋みたいから急ごうよー!」

「わかった」

私と柁は荷物を持って昇降機に乗り込んだ。

（よし!! チャンス!!）

私は柁とくつつくためにわざと詰めた。

「なあ流音」

「何?」

「少しくつつき過ぎじゃないか?」

「いいの、いいの」

「……………まあ荷物が多し、いいか」

柁は照れたりせずになんと言った。

全く……… 柩は鈍感なんだから………。

ポーン！！

「あ、着いたみたい」

「さて……… 降りよう」

柩は荷物を持って降りた。

「待つてよ」

私もそれに遅れて降りる。

「えーっと……… 508、508、508……… あったあった」

「俺はその隣だから見つけるのは簡単だな」

「とりあえず荷物を片付けたら柩の部屋に行くからよろしくね」

「りょーかい」

私は自分の部屋に入った。

そして入った瞬間の一言は

「うわおー！！」

だった。

どこかのホテルにあるスイートルームのような部屋だったからだ。

実際、スイートルームなんて入った事無いけどさ。

少なくとも番組で見たよりは豪華だ。

大きなソファが2つ、大きなベットが1つ、大画面テレビが1つ……
………凄っ！！

一人暮らしには勿体ないなあ……。

おっ……と早く荷物を整理して柁の部屋に行かないと。

「荷物をさっさと整理しよっ」と

私は荷物を整理し始めた。

学園生活の始まり（後書き）

意見、感想、その他諸々、お待ちしております。

新しい友達と夕飯

パンツ！！　パンツ！！

「大体、こんな感じで良いよね？」

私は家具やら何やらを綺麗な感じに配置した後、手をはたいた。

これで桎がいつ来ても大丈夫だね。

「さて、桎の部屋に行こう」と

私はルンルン気分で、部屋を出た。

そして隣の部屋に行ってインターホンを鳴らす。

ピンポン！！

「桎。居る？」

ガチャ！！

「流音。遅かったな」

「ちょっとだけ時間がかかったんだ。中に入っているよね？」

「良いよ」

「わーい」

私は柁の部屋に入った。

入ってすぐに私と柁の部屋に違いが見つかった。

「あれ？ 私の部屋と違うみたい？」

「そうなのか？」

「私の部屋は洋風だったけど、柁の部屋は和風なの」

「へえ。部屋によって違うのかな？」

「そうじゃない？」

「で、学園の地図を見ながら散策するか？ 校内を一通り見ておきたいし」

「良いよ。……でも案内してくれる人が居たら楽なんだけどね」

私がそう言った瞬間、

ピンポンー！！

インターホンが鳴った。

「はい。誰ですか？」

「あ、510室の者です。挨拶に来ました」

「今行きます」

柩は扉に向かっていった。

私もその後ろについていく。

ガチャ！！

扉を開けると白髪の小さな女の子がいた。

その女の子の腰には刀を入れる鞘があった。

レプリカかな？

「はじめまして。私、中学3年生の魂魄妖夢と申します」

「俺は高校1年生の高宮 柩。よろしく」

「で、後ろの方は508室の人ですか？」

「うん。私も高校1年生の天崎 流音。よろしくね。妖夢」

「よろしくお願いします」

妖夢がそう言った後、別の声が聞こえた。

「妖夢さ〜ん。流音さん見た〜？ 部屋に反応が無いんですけど」

「居ましたよ。柩さんの部屋です」

「わかった。おつ……と。はじめまして。507室の高校1東風谷早苗です」

今度は緑の髪をした女の子だった。

……………胸でかいなあ。

「高宮柁だ」

「天崎流音です」

「これから予定があったりしますか？」

「これから学園を回ろうかって思ってるけど……」

「あ、ちょうど良かったです。案内して差し上げようって早苗さんと相談してたんですよ」

「ラッキー！！ 誰かに案内して欲しいなって考えてたんだよね。いやー助かるな」

「それじゃあ行きますか？」

「流音。行くとするか？」

「行こう！！ 行こう！！」

「それじゃあ行きましょう」

私達は妖夢と早苗に学園を案内して貰う事になった。

日が暮れる頃、寮のロビーに戻ってきた。

「これで寮以外は一通り案内しましたが、質問とかはありますか？」

「無し」

「流音に同じ」

「さて、最後は寮の食堂に行きましょう」

「はい」

「わかった」

「それでは8階へ向かうとしましょう」

「1階はロビーで2階から7階が生徒の自室、8階は食堂、9階は先生の部屋なんです」

「へー。そうなんだ」

「昇降機が来たよ」

私達は昇降機に乗り込んだ。

「食堂ってどんな感じ？」

「結構美味しいよ。それに綺麗だし」

「ちなみに部屋の電話から食堂に掛けて、部屋への宅配サービスも出来るよ」

「便利だな」

「で、どうする？ 今日食堂か、宅配か」

「せっかく食堂に行くんだから食堂で食べるよ」

「じゃあ私達と食べましょうか」

「うん」

「良いですよ」

「わかった」

ポーン！！

昇降機が7階で止まった。

「あ、誰か乗ってきますよ」

入ってきたのは緑の髪をした美人さんだった。

「ん？ 見ない顔ね？」

「私、今日から転入してきた高校1年生の天崎流音です」

「同じく高宮柊です」

「私は風見幽香。高校2年生よ」

「幽香さんも食堂に行くんですか？」

「そうだけど……貴方達もそうなの？」

「はい。案内ついでに食事をしようと」

「幽香さんもどうですか？」

「今回はパス。勉強しながら食べるからね」

幽香さんは教材を見せてそう言った。

「そうですか……また次回に食べましょう」

「そうね」

ポーン！！

「あ、着きましたね」

「じゃあ降りましょうか」

「はい」

「ああ」

私達は昇降機から降りた。

そして食堂の中に入る。

「じゃあ私はここで」

「あ、はい。……………それにしても賑やかあ……………」

「……………そうだな」

私は入った途端に言葉を漏らした。

丸い形のグループテーブル、個人席、和風の席……色々と席に種類があった。

生徒達は席に座り雑談したり、勉強したりしている。

「あそこに座りましょう」

「そうだね」

「このメニューに和の料理つてあるのか？」

「和・洋・中……全部ありますよ」

「そうか。安心した」

私達はグループ席に座った。

そして早苗からメニュー表を渡される。

「何を食べますか？」

「俺はヒレカツ定食だな」

「私は……日替わりにしよつと」

「私はいつも通りに和風定食で」

「じゃあ今日は私も和風定食にしましょう」

早苗はメニュー表を片付け、券を渡してくれた。

「これを渡せば料理をもらえるからね」

「……お金いらないの？」

「まあね。学費の中にその分が入ってるみたいだし」

「なるほど。色々と便利なシステムかもしれないな」

「あ、誰が席番する？」

「俺がやろう」

「わかった。少し待っててね」

私達は桎を置いてご飯を取りに行った。

そして並ぶとすぐに早苗と妖夢が話し掛けてきた。

「ねえ、流音さん」

「なあに？」

「もしかして桎さんの事、好きですか？」

「な、な、な、何を言ってるの！？　べ、別に桎の事なんて……」

「焦ってるのばれてますよ」

「むうー……」

「でも柁さんって和風の大人しい人ですよね」

「……………まあね。でも柁はスイッチが入ると暴走するんだよね。今は仲良くなるまで大人しいだけだよ」

「スイッチ？　どんな？」

「秘密。でもいずれ分かんと思うよ」

「わかったわ。楽しみに待つとしようっと」

「あ、順番みたいです。流音さん、券を渡して下さい」

「はい」

私は食堂の人に券を渡した。

なんか料理してる人、メイド服着てる。

それになんか羽生えてる……………。

ま、いつか。

「お待ちどうさま」

「はい」

私の料理がもう出てきた。

仕事早いなあ。」

さて、早く戻って柁とバトンタッチしなきゃね。

タタタ……………。

「柁。交代。」

「わかったよ。」

「早くね。」

「善処するさ。」

柁は列に並んだ。

そしてすぐに早苗達 came。

「お待たせしました。」

「柁さんが来るまで待ちますか？」

「そうしょっか。」

私達は柁を待つ事にした。

「で、さっきの話の続きなんだけど……………」

「何？」

「柁さんとはいつからの付き合いなんですか？」

「幼稚園からだね。家も近いしよく遊んでたよ」

「そうなんだ。ちなみに柁さんの良いところは？」

「どんなに大変な時でも私を心配してくれるし、しっかりと話を聞いてくれるし、他にも……………」

「あ、もう良いです。柁さんが来そうなんで」

「え？ うん。わかった」

良いところを途中で止めた。

まあ柁がこっちに歩いてきてるからね。

……まだ言い足りないなあ。

「待たせてすまない」

「大丈夫ですよ」

「それじゃあ食べるとしましょうか」

「そうだね」

「わかった」

「……………いただきます!!」

私達はみんなで仲良く食事を始めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6698z/>

東方学園録 ～ここが幻想のフロンティア～

2011年12月27日01時58分発行